
とある魔術の九十九式

ん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の九十九式

【Nコード】

N5834S

【作者名】

ん

【あらすじ】

上条当麻のかようとある学園に一人の少女が転校してきた。その名も道ノ宮^{みちのみやうつひ}優日。その少女との出会いが戦いのはじまりをつける。

魔術と科学が交差するとき物語がはじまる。

とまあ、かつこつけてみましたが、処女作なので相当つまらないとおもいます。それでも構わないという方は読んでいってくださいとうれしいです。設定とか他の漫画からちよくちよく持ってきてます。受験勉強の合間に息抜き程度でやっていくので更新はおそくなる

と思います。

時間軸？

ストーリーの流れ？

そんな幻想ぶち殺す

1、はじまり（前書き）

かなり好きかってにやっています。

すみません

1、はじまり

1、

立ちこめる土埃と阿鼻叫喚のなかで、神裂火織は意識をとりもどした。

彼女はすでにいくつもの傷を負い、立つことすらままならない。そんな状態でありながらも神裂はちかくの大きな瓦礫でからだをささえながら、なんとか立ちあがった。

うまく力がはいらない。

気をぬけばすぐにでも切れてしまいそうな意識でまわりの様子を伺うと、神裂からそう遠くないところに瓦礫の間にはさまれて倒れている仲間の姿をいくつか見つける。

助けなくてはならないと思うものの、神裂本人もささえがなくては立つこともできない。

ささえにしようと、令刀、七天七刀をさがすが、見つけることもかなわない。

敵にやられたときにでも、どこかへとばされてしまったのかもしれない。

かなたから稲妻にいた激しい戦いの音が神裂の耳にも届く。その音からまだ戦闘がまだ終わってないことを神裂は知るもなにもできない。

（負けた……っ）

神裂は己の非力さに奥歯を噛み締めながらそう思った。

そう思うほかない。

今まで自身がくらしていた女子寮はもはや見るかげもなく、まわりには傷で動けぬ仲間たち。

（あの最大司教のことですから、あの娘のことはちゃんと守りきるでしょうが、しかしこれではっ！）

負けたも同じ。

必要悪の教会は半壊したも同然。

たった四人にここまで――、

神裂自身も敵に手も足もでなかった。

（まさか、敵の力がここまでとは……）

油断をしていたというのもある。油断もしよう。

きいていた相手は四人とちいさな組織、対してこちらはイギリス清教の必要悪の教会。各々の戦力の質の高さはほかの教会の比ではない。

負けるはずはないと思っていた。

それが証拠にほんの一时间まえにはいつものように楽しく過ごしていたのだから。

最低限の見張りや結界をつけていたとはいえ、気をぬきすぎていた。

その結果がこれだ。

目のまえの光景に涙がでそうになる。

だが神裂はそこをぐっとこらえ、いま己ができることは何かを考える。

と、そこでそこらかしこに転がる瓦礫のかけから、ひょっこりと一人、男があらわれた。

ワックスで整えられたら黒髪に他人を馬鹿にするかのような笑みのはりついた顔。年齢は、その顔かたちから神裂と同じくらいかと思われる。

神裂のからだが一瞬にしてこわばる。

（敵！）

そのすがたはまさしく神裂たちをおそった敵のうちの一人だったからでもある。

しかし、それ以上に彼女をこわばらせたのは、敵の手に握られた見なれた刀。

「七天七天っ」

神裂は思わずこえにだしてしまふ。

「なんだ、ねえちゃん？ これアンタの刀だったの」

男は神裂のこえにさらに笑みを深くして、ゆっくりと近づく。その刀を見せつけるように。軽々と持ちあげて。

本来ならば七天七刀は普通の人間が使えるような刀ではない。並みの人間であれば、持ちあげるだけでもそうとうの力をろうするだろう。

（例の『力』ですか……）

神裂はすぐに悟る。

「あんま驚かないのな。つまんねえの」

男はじつにつまらなさいと言わんばかりの顔をしながら、刀をおろした。

「こちらがなにも知らないとでも？」

「はっ！ 笑えねえ。そのわりにゴテゴテのボロボロだけだな」

せめてもの強がりさえ男に一蹴されながらも、神裂はどうするべきかをかんがえていた。

ちかくには意識を失い倒れている仲間たち。神裂自身も戦える状態ではない。敵は多少の傷が見つけられるものの、たかが知れている。勝つことは不可能。にげることさえできるかどうか。

と、

「なあ、ねえちゃんよ」

男がとつぜんこえをかけてくる。神裂はかんがえを頭のすみにとどめながら、男のことばに意識をうつした。

「いや、そんなこわい顔するなよ。せつかくの美人が台無しだぜ。

俺はただ感心してるんだ」

「感心とは？」

「いい刀だ……」

男はそういうと、静かに鞘から刀をぬき、その刃を見つめる。その表情はすこしうつとりしているようにも見える。

「いい刀ってのは、たいがいすこぶる腕のたつ職人がうつてるもん

だ。一流の刀鍛冶ってヤツだな」

「……」

神裂はなにもいわない。

「そしてそうした一流の職人がつくったものにはよ、そりゃ強い思いがこめられているもんだ。なあ、ねえちゃん」

男はそういうと、じろりと神裂をにらむ。その顔にはさきほどまでの笑みはどこにもない。

「ねえちゃんよ。ねえちゃんは理解しているか？ 分かるか？ この刀にやどっている作り手の思いってやつによ」

「……」

「逆によ、長い間ひとつのものを大切に使っていると、そのものには使い手の思いもやどるものだ。ねえちゃん。アンタずいぶんこの刀を大切に使っているみたいだね。だからよ、伝わってくるんだわ。アンタの思いってやつがこの刀からよ」

「思い……」

神裂の頭のなかで警鐘がなりひびく。にげろと。きけんだと。

「しかしなんだあこりゃ？ 笑えねえな。オイ。アンタはなにもわかってねえ……この刀の使い方ってやつをよ」

男は刀を鞘におさめると、そのままとある構えへとうつる。

神裂はその光景に目を見ひらいた。その独特の構え、呼吸のリズ

ム、まるでそれは――

「馬鹿なっ！ そんなっ」

思わずさけぶもすでおそい。

「――唯閃」

男は刀をふりぬき、

なにも見えなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5834s/>

とある魔術の九十九式

2011年4月19日07時40分発行